

海の道むなかた館長

第5回 邪馬台国九州説について

西谷 正

I はじめに

倭人伝に見える邪馬台国

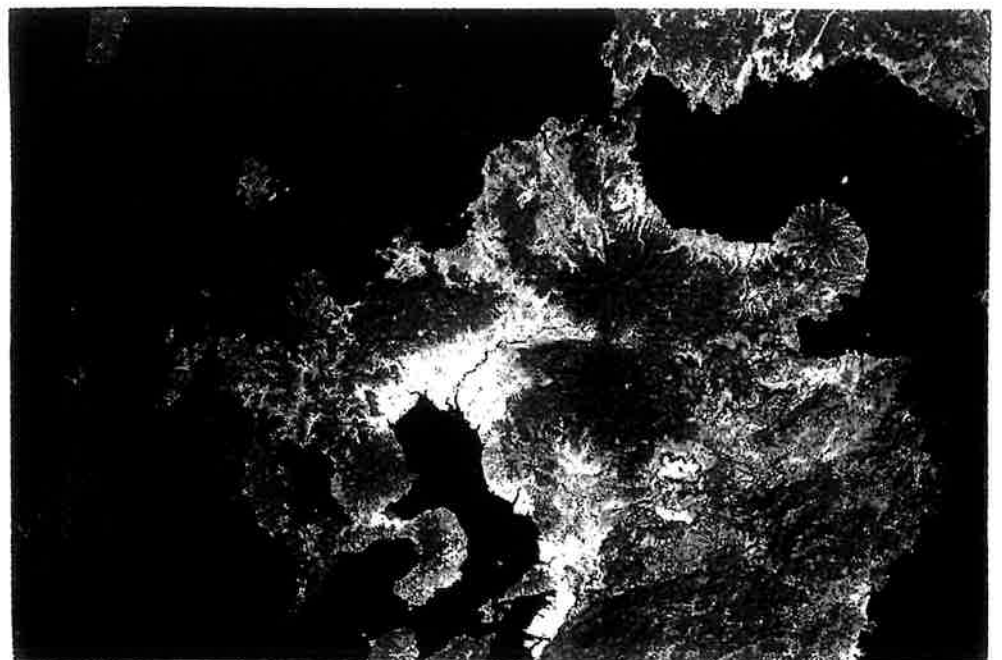
II 邪馬台国九州説の諸説

- (1) 筑後・山門説
- (2) 筑後・甘木、朝倉説
- (3) 筑後・久留米、八女説
- (4) 肥前・吉野ヶ里説

III 筑後・山門説について

- (1) 調査・研究の歴史
- (2) 旧石器・縄文時代の山門郡
- (3) 弥生時代前・中期の山門郡
- (4) 弥生時代後期・古墳時代前半期の山門郡

IV おわりに



南至邪

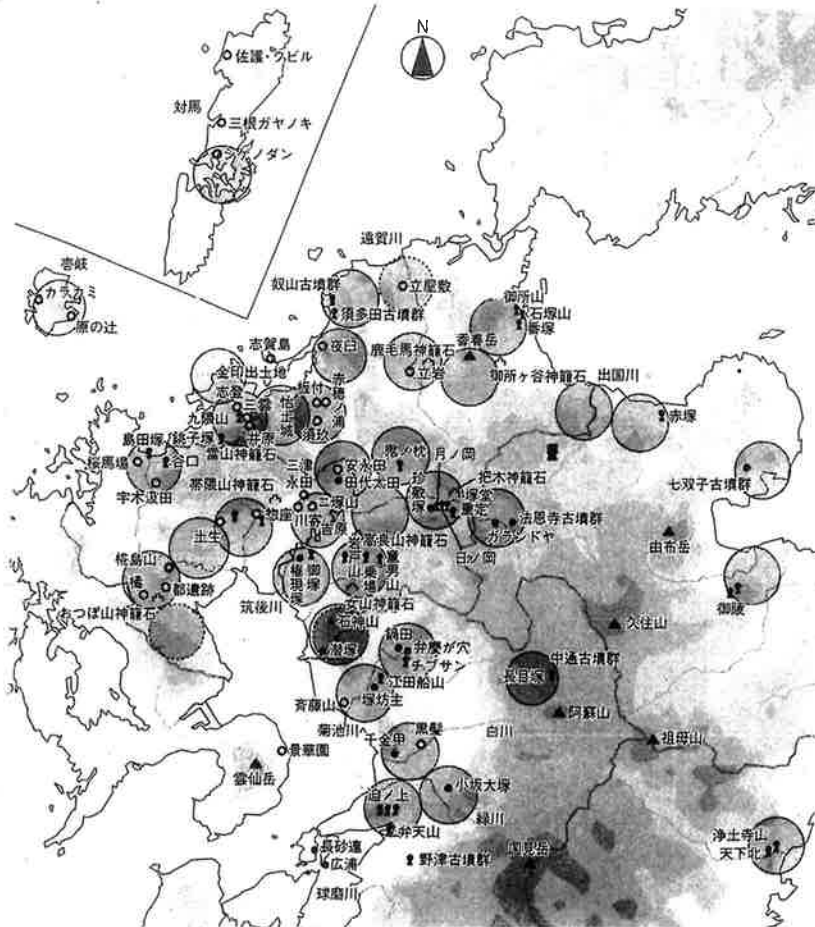
馬壹國女王之所都水行十日陸行一月官有伊支馬次曰彌馬升次曰彌馬獲支次曰奴佳鞮可七萬餘戶自女王國以北其戶數道里可得略載其餘旁國遠絕不可得詳

其國本亦以男子爲王住七八十年倭國亂相攻伐歷年乃共立一女子爲王名曰卑彌呼事鬼道能惑衆年已長大無夫婿有男弟佐治國自爲王以來少有見者以婢千人自侍唯有男子一人給飲食傳辭出入居處宮室樓觀城柵嚴設常有人持兵守衛

⑧南、邪馬壹國に至る。女王の都する所なり。水行十日、陸行一月なり。官に伊支馬あり。次を彌馬升といひ、次を彌馬獲支といひ、次を奴佳鞮といひ。七万余戸ばかりあり。女王國より以北は、その戸數道里を略載し得べくも、その余の旁國は、遠絶にして、詳らかにすることを得べからず。

⑨其の國、もと亦男子を以て王となす。住まること七八十年、倭國亂れ、相攻伐すること年を歴たり。乃ち一女子を共立して王となし、名づけて卑彌呼と曰う。

鬼道に事え、能く衆を惑わす。年已に長大なるも、夫婿無し。男弟ありて、佐けて國を治む。王となりてより以來、見る有る者少し。婢千人を以て自ら侍らしめ、唯男子一人ありて、飲食を給し、辭を伝えて出入す。居る處の宮室は、樓觀城柵嚴かに設け、常に人あり、兵を持して守衛す。

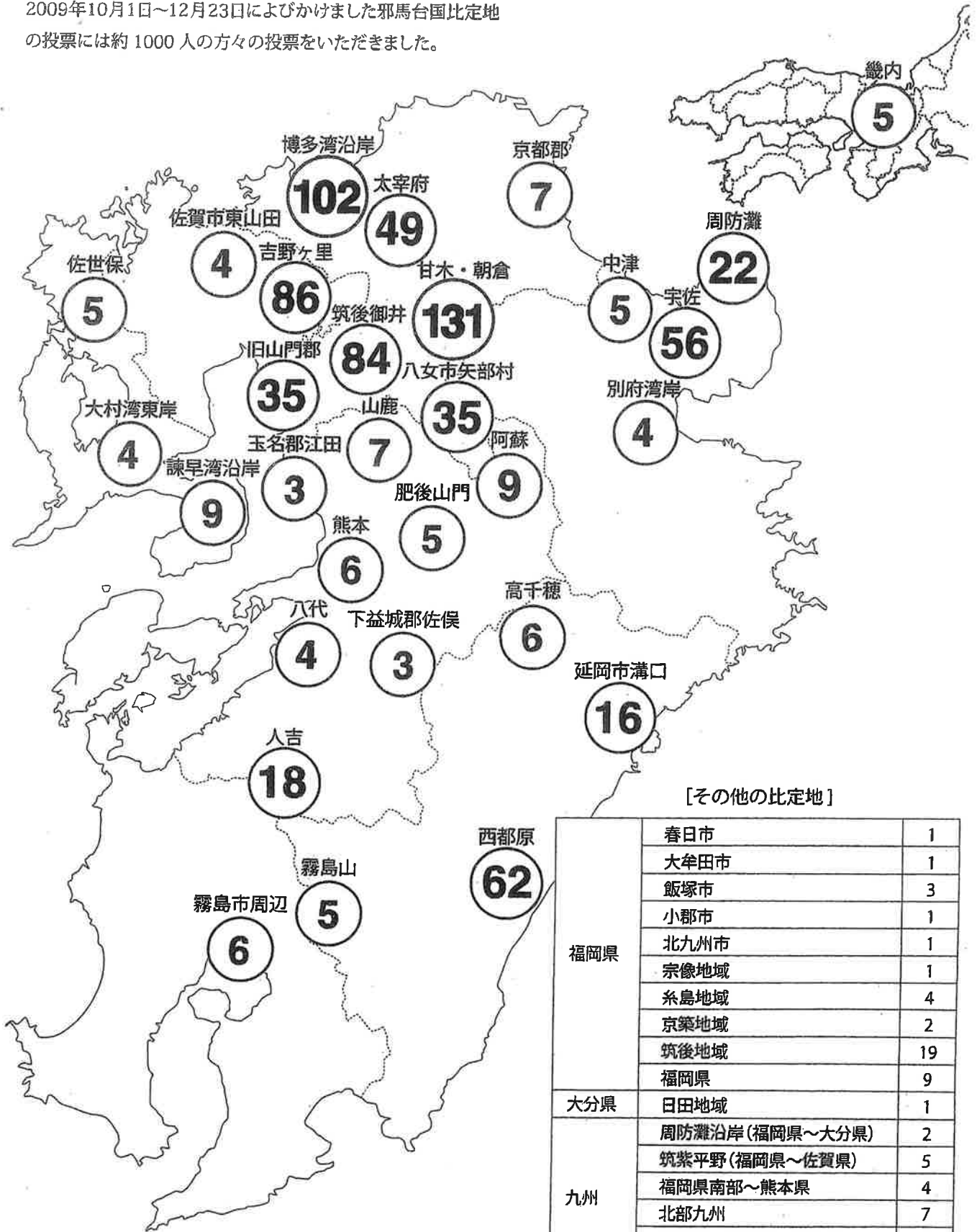


邪馬台國時代の北部九州の「クニグニ」

石野博信編、二〇一〇年 邪馬台國とは何か
吉野ヶ里遺跡と纏白遺跡
新泉社

「あなたが決める邪馬台国」集計結果

2009年10月1日～12月23日によびかけました邪馬台国比定地の投票には約1000人の方々の投票をいただきました。

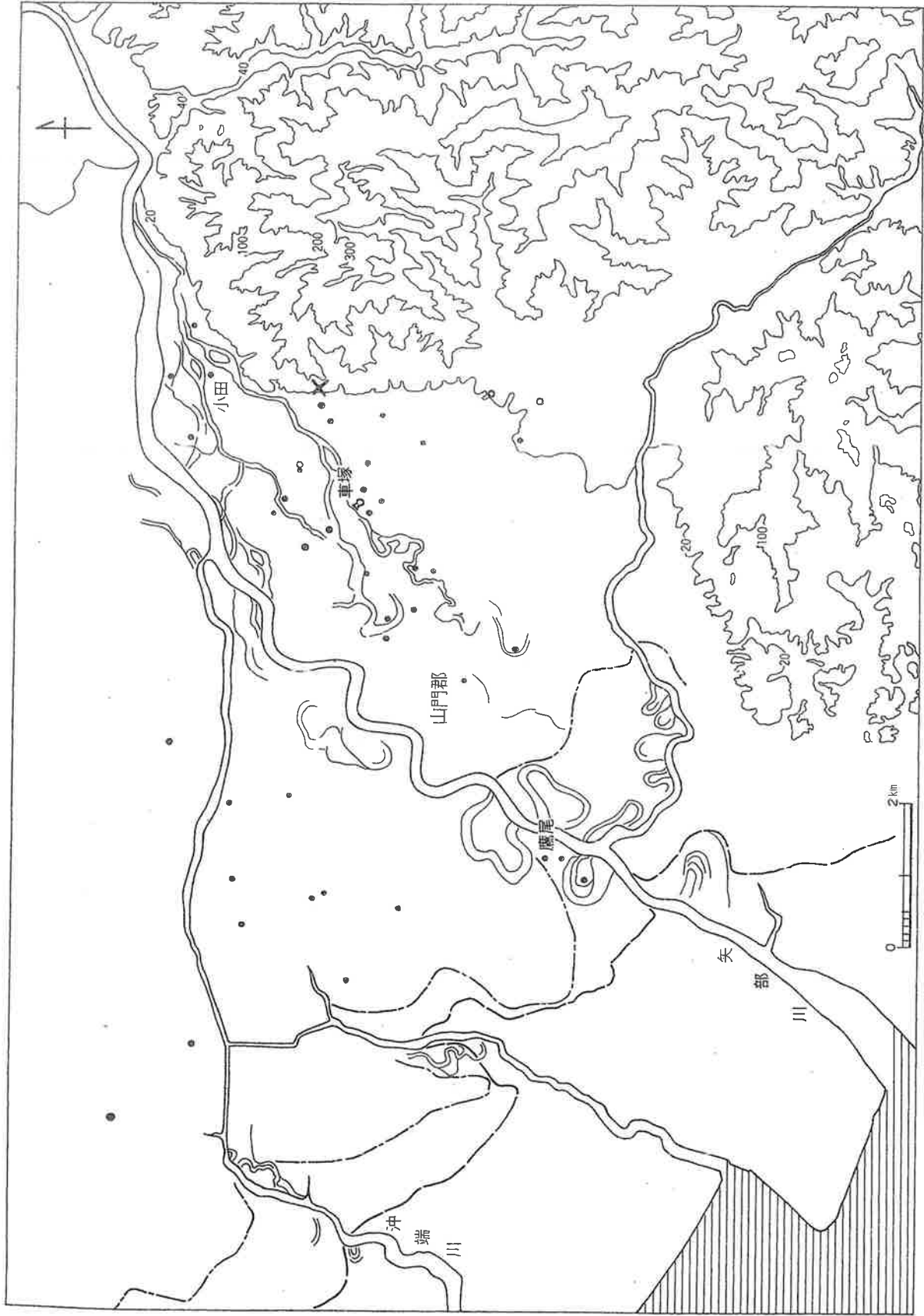


[その他の比定地]

福岡県	春日市	1
	大牟田市	1
	飯塚市	3
	小郡市	1
	北九州市	1
	宗像地域	1
	糸島地域	4
	京築地域	2
	筑後地域	19
福岡県	9	
大分県	日田地域	1
九州	周防灘沿岸(福岡県～大分県)	2
	筑紫平野(福岡県～佐賀県)	5
	福岡県南部～熊本県	4
	北部九州	7
	福岡県～佐賀県～熊本県	1
九州	16	
国外	鴨緑江	1
	架空の国	1



福岡県教育委員会, 1977 『九州雑貨自動車道関係系埋蔵文化財調査報告 -XIV- 福岡県山門郡程高町所在大道端遺跡の調査』

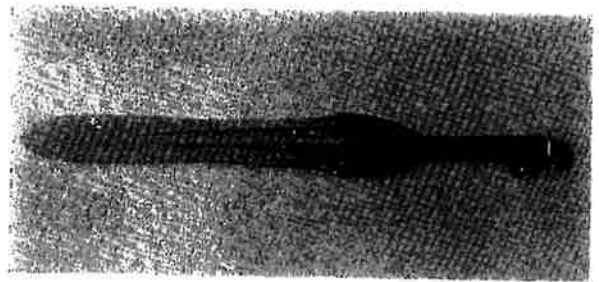


弥生時代後期遺跡・前半期古墳分布図

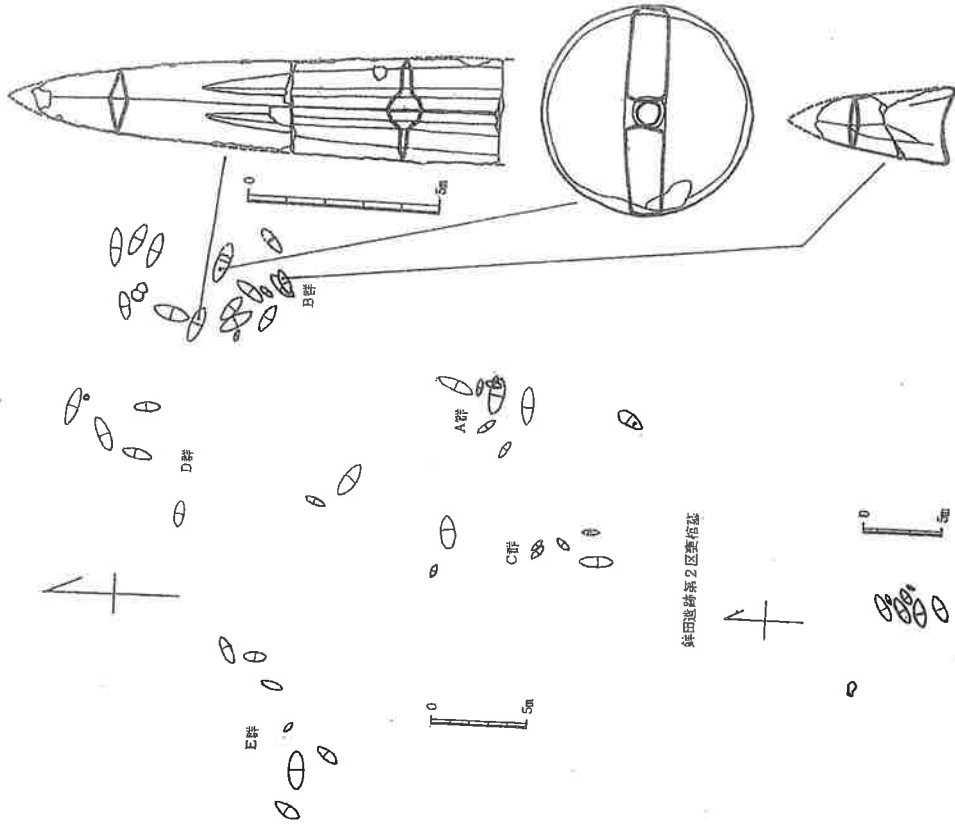
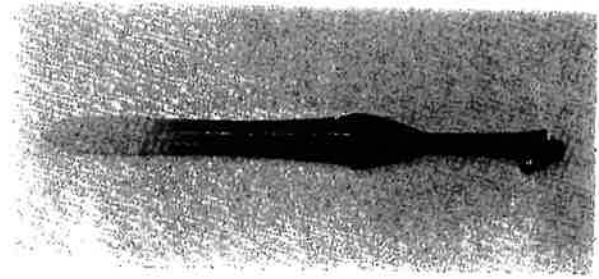
- 弥生時代後期遺跡
- 前半期古墳
- × 女山銅矛出土地



女山銅矛出土地（中央中庵付近）



女山出土の銅矛

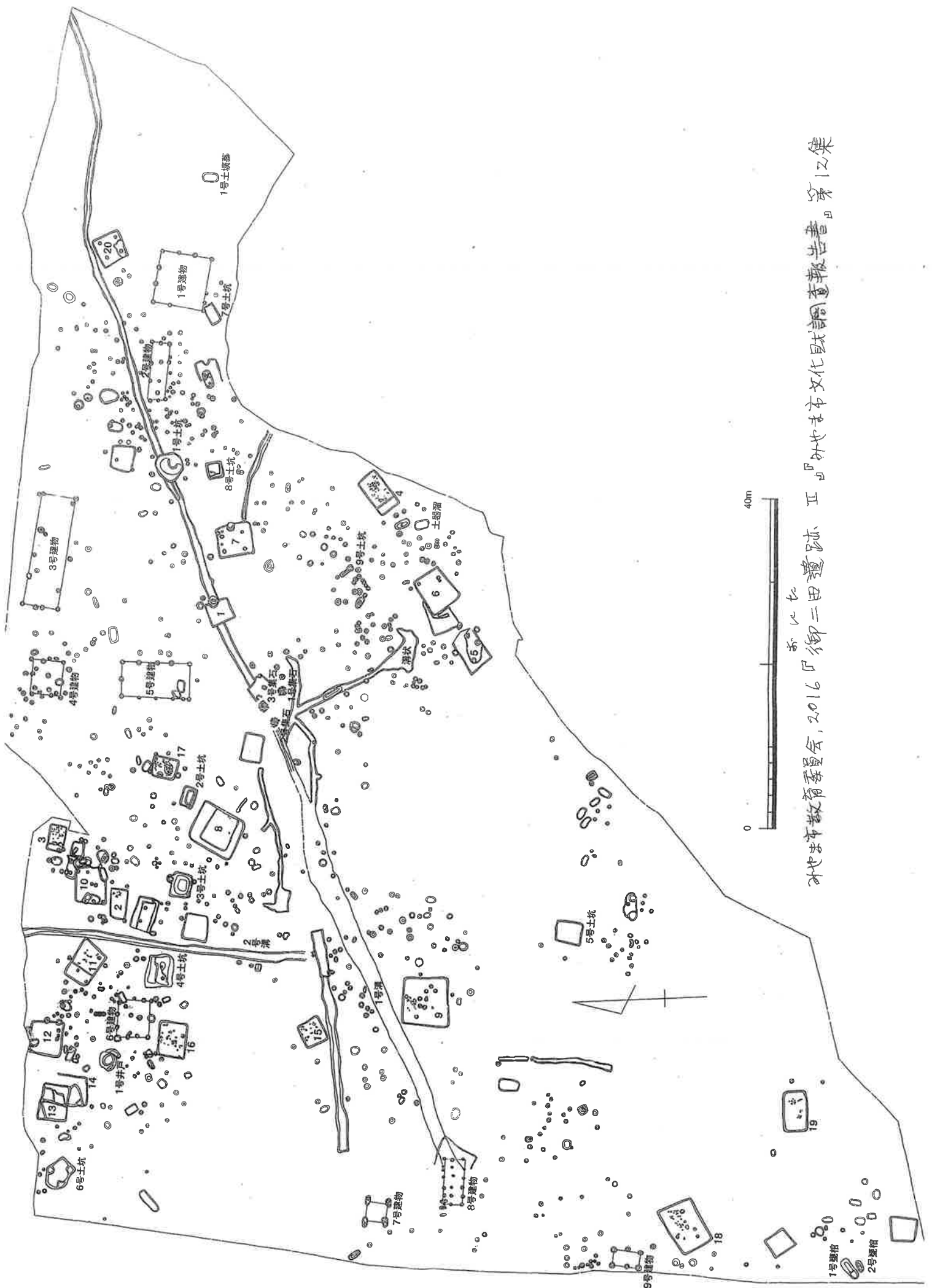


銚田遺跡第2区墓陪葬

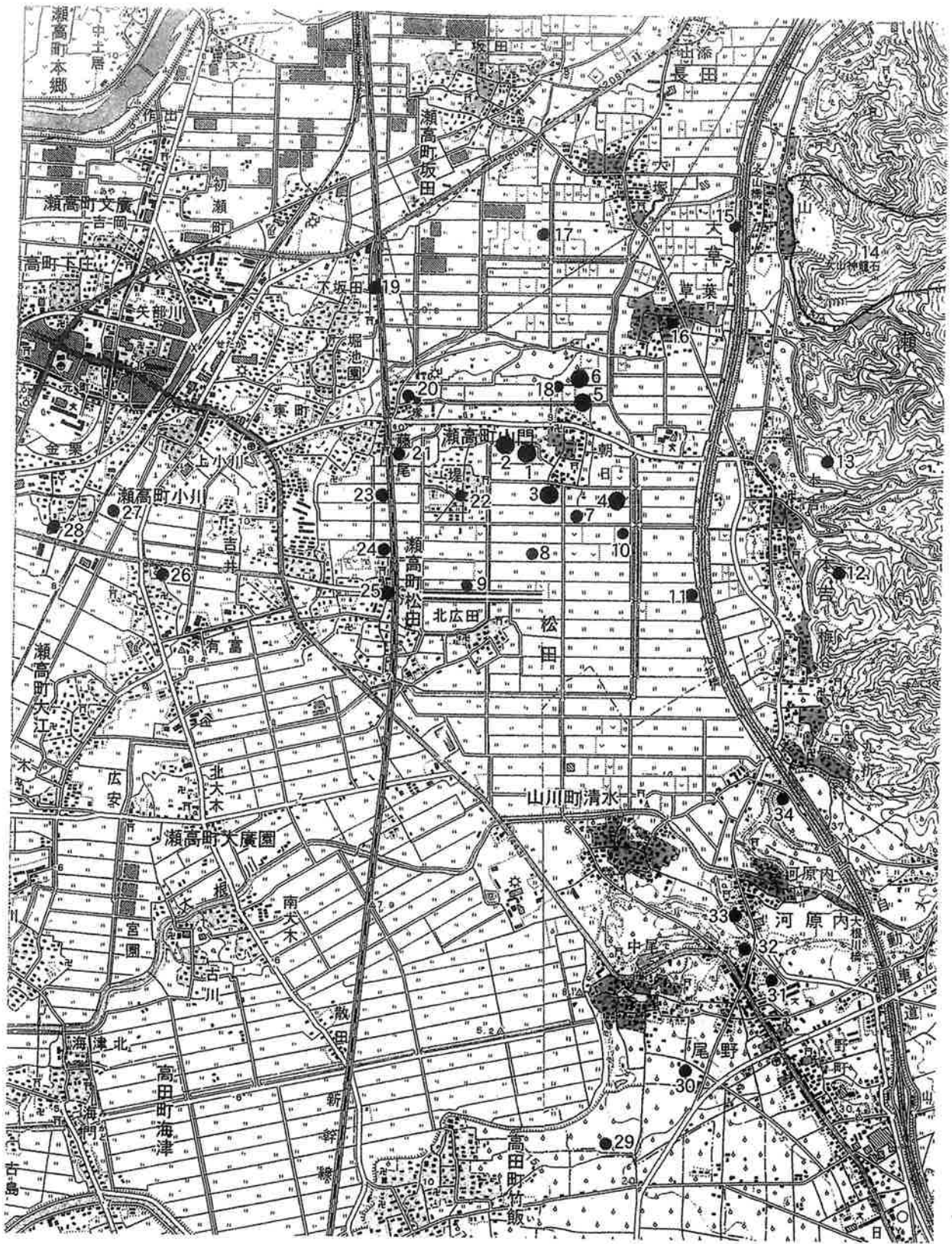


銚田遺跡第3区墓陪葬

銚田遺跡墓陪葬とその副葬品
（墓陪葬配置図は鎌山猛氏原図から構成）



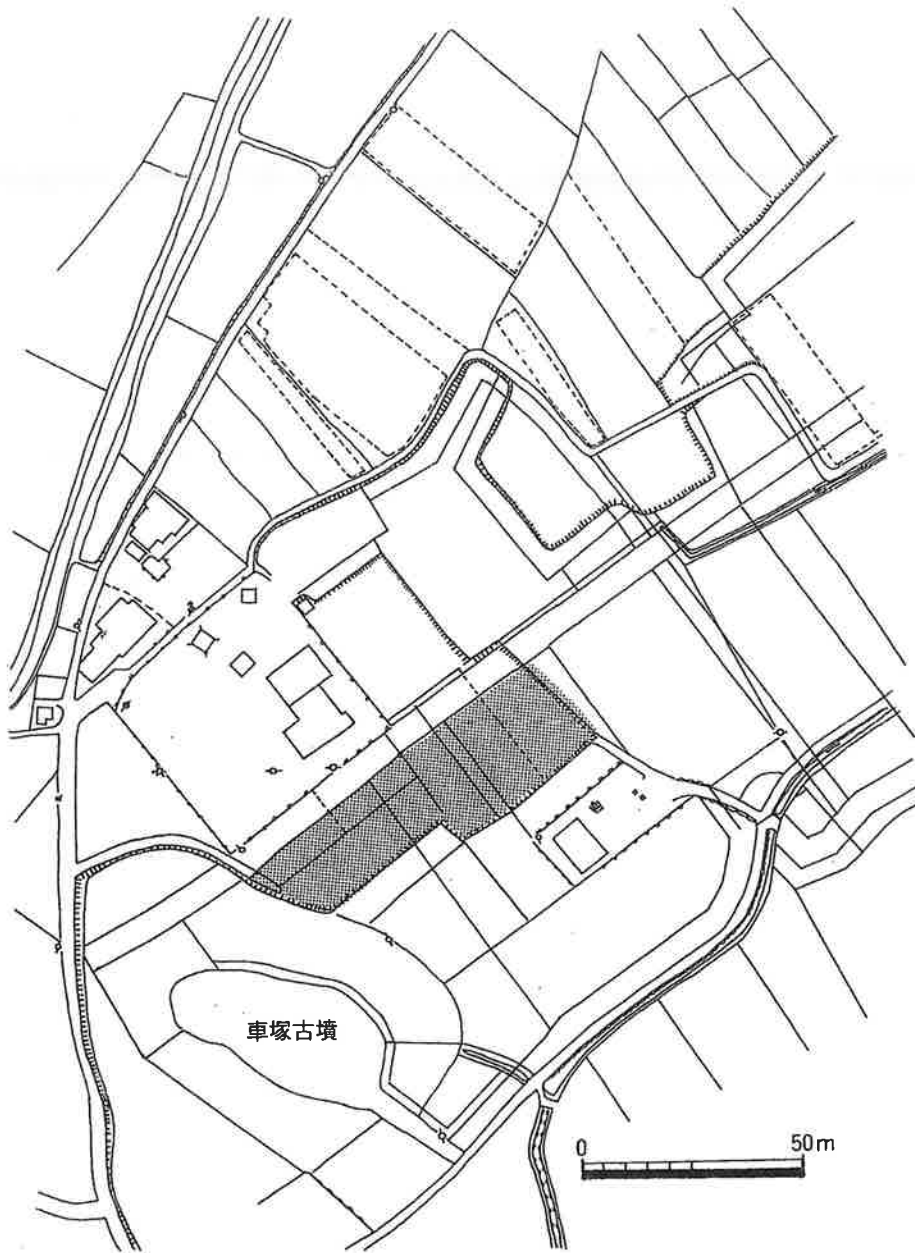
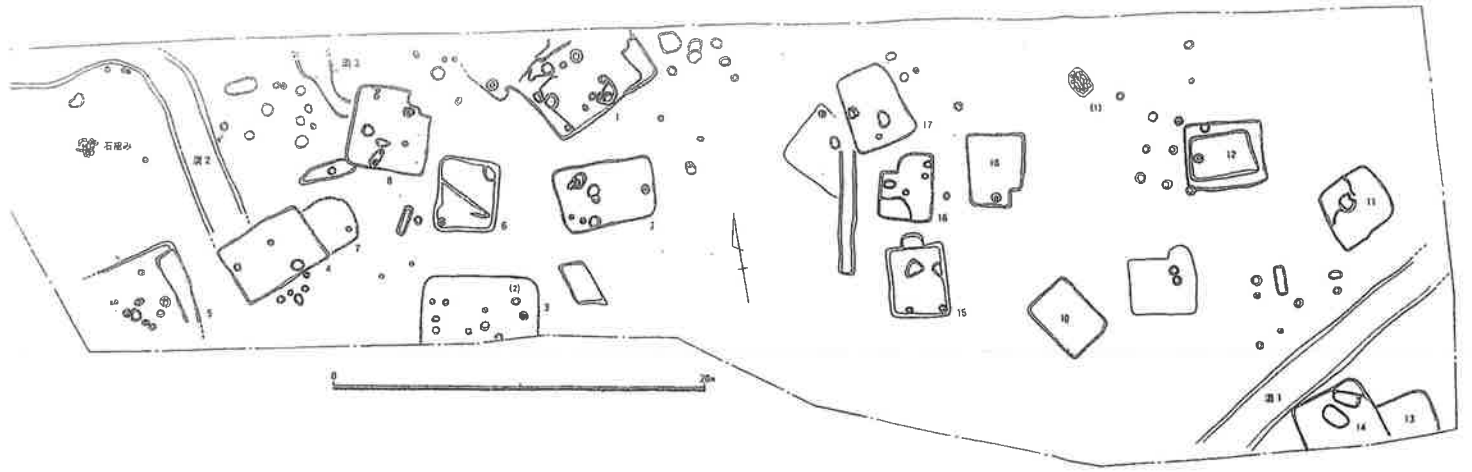
水戸市教育委員会, 2016 『水戸市文化財調査報告書』 第12集
 水戸市御三田遺跡 II



周辺遺跡分布図 (1/25,000)

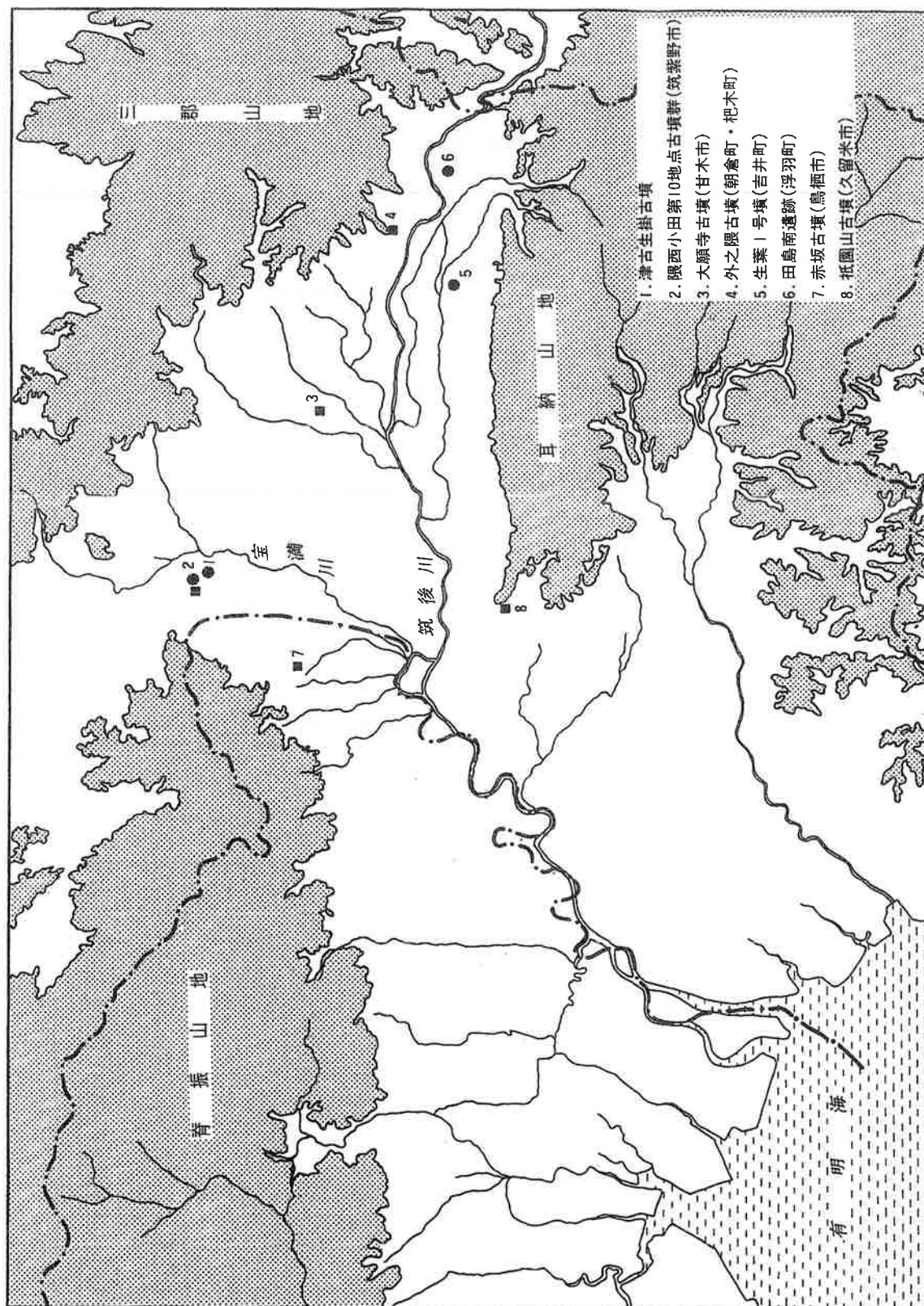
- | | | | | |
|------------|---------------|-------------|-------------|-----------|
| 1 山門倒木遺跡 | 2 山門北ノ元遺跡 | 3 山門南ノ前遺跡 | 4 山門寺門遺跡 | 5 山門幸賀遺跡 |
| 6 山門野入遺跡 | 7 山門井鎌口遺跡 | 8 山門フミアガリ遺跡 | 9 山門ガラン遺跡 | 10 山門牛島遺跡 |
| 11 本吉遺跡 | 12 成合寺谷古墳 | 13 三船山遺跡 | 14 女山神籠石 | 15 大道端遺跡 |
| 16 草場遺跡 | 17 権現塚北・権現塚古墳 | 18 御二田遺跡 | 19 小川柳ノ内遺跡 | 20 車塚古墳 |
| 21 藤の尾垣添遺跡 | 22 堤古墳群 | 23 山門北池遺跡 | 24 山門前田遺跡 | 25 松田掛畑遺跡 |
| 26 上批杷遺跡 | 27 鉾田遺跡 | 28 金栗遺跡 | 29 竹飯犬ノ馬場遺跡 | 30 長者原遺跡 |
| 31 クワンス塚古墳 | 32 赤坂古墳群 | 33 山ノ上遺跡 | 34 九折大塚古墳 | |

みやま市教育委員会, 2014 『山門遺跡群 Ⅲ』 『みやま市文化財調査報告書』 第9集



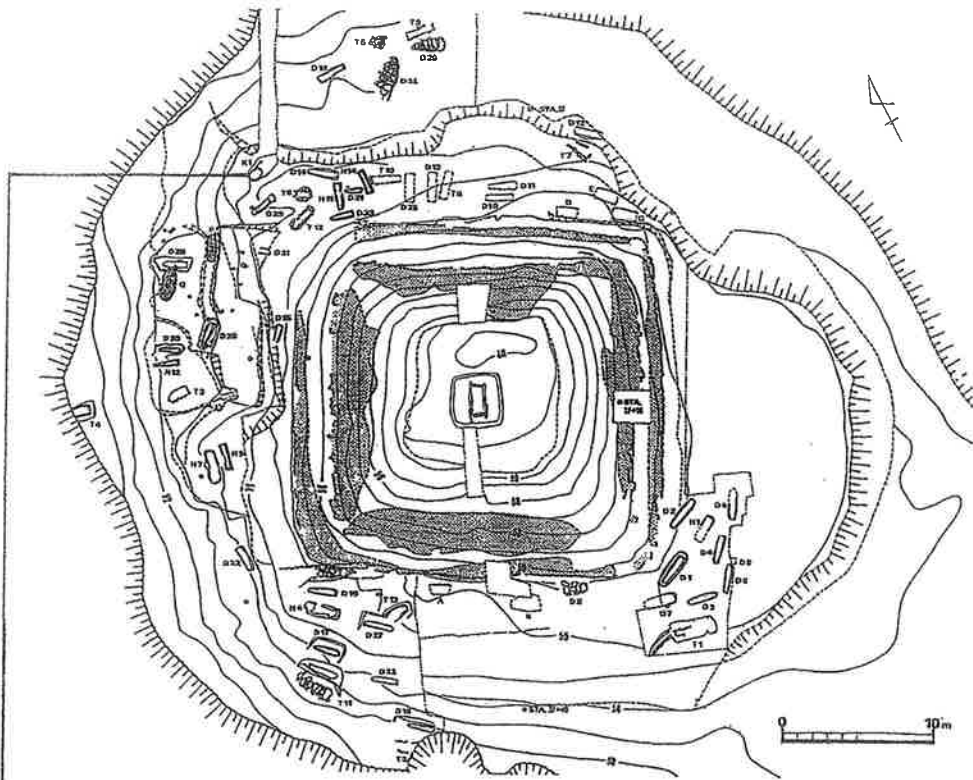
周辺地形図及び発掘図

瀬高町教育委員会, 1996 『藤尾車塚遺跡 II』, 瀬高町文化財調査報告書 第13集



筑紫平野の出現期古墳

小冊子史編集委員会, 1996年 小冊子史, 第1巻 通史編 地理・原始・古代



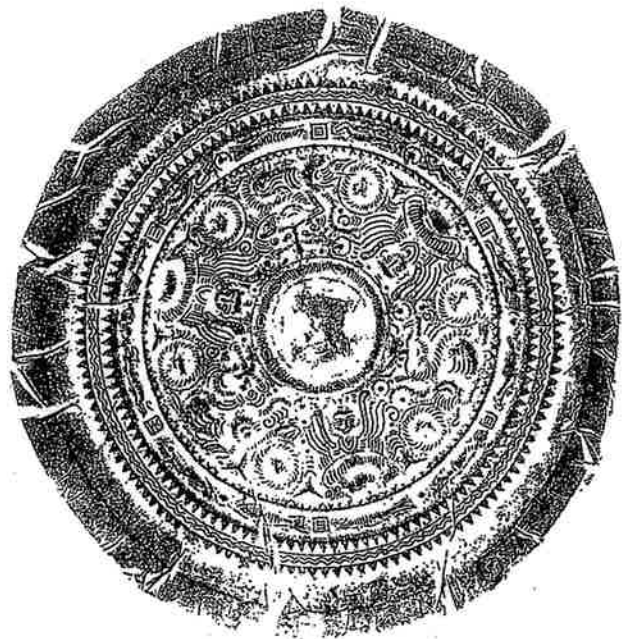
祇園山古墳全体図



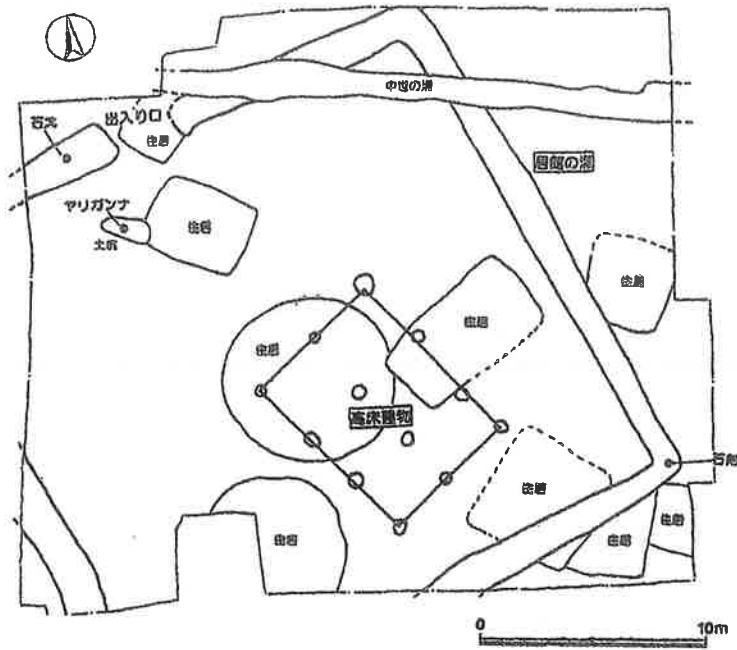
1号甕棺出土半円方帯鏡(復原径 10.4cm)

1994

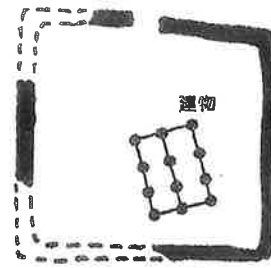
『久留米市史』第12巻 資料編 考古



高良大社蔵 三角縁神獸鏡(径 22.1cm)



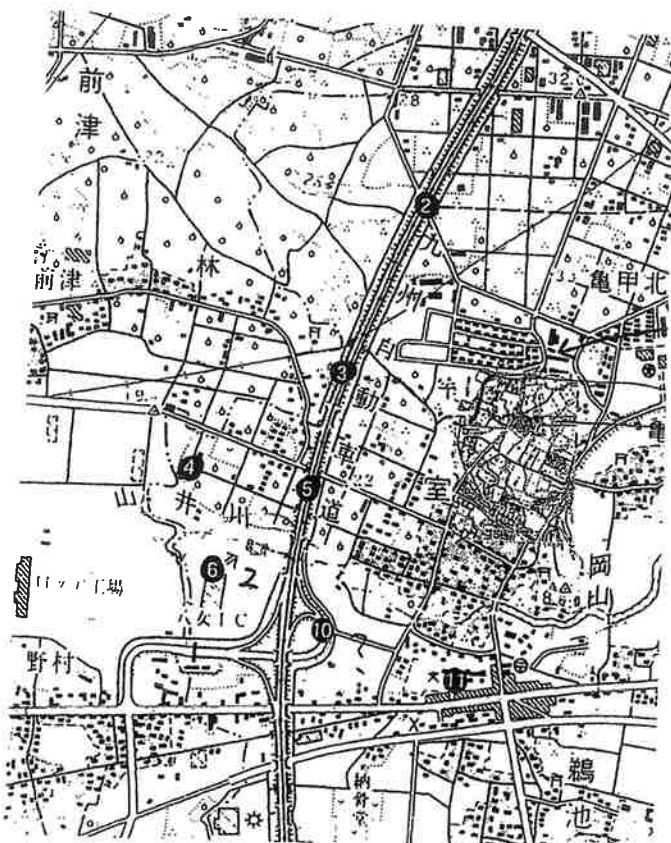
市ノ上東屋敷遺跡の平面略図



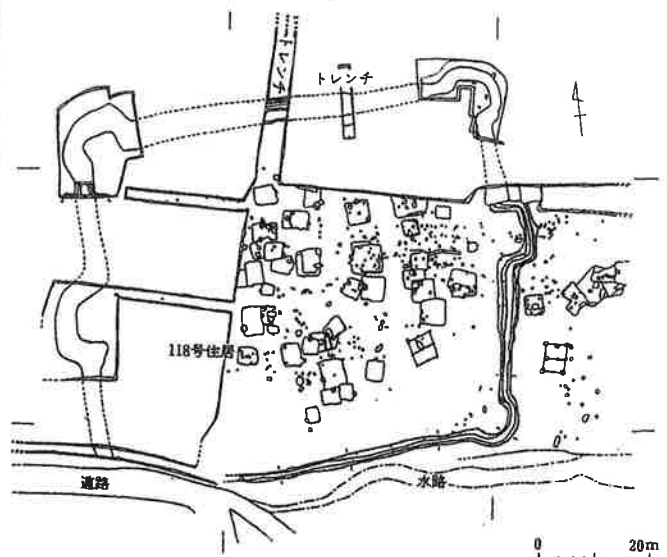
市ノ上東屋敷 (久留米市)
【625㎡ = 約190坪】



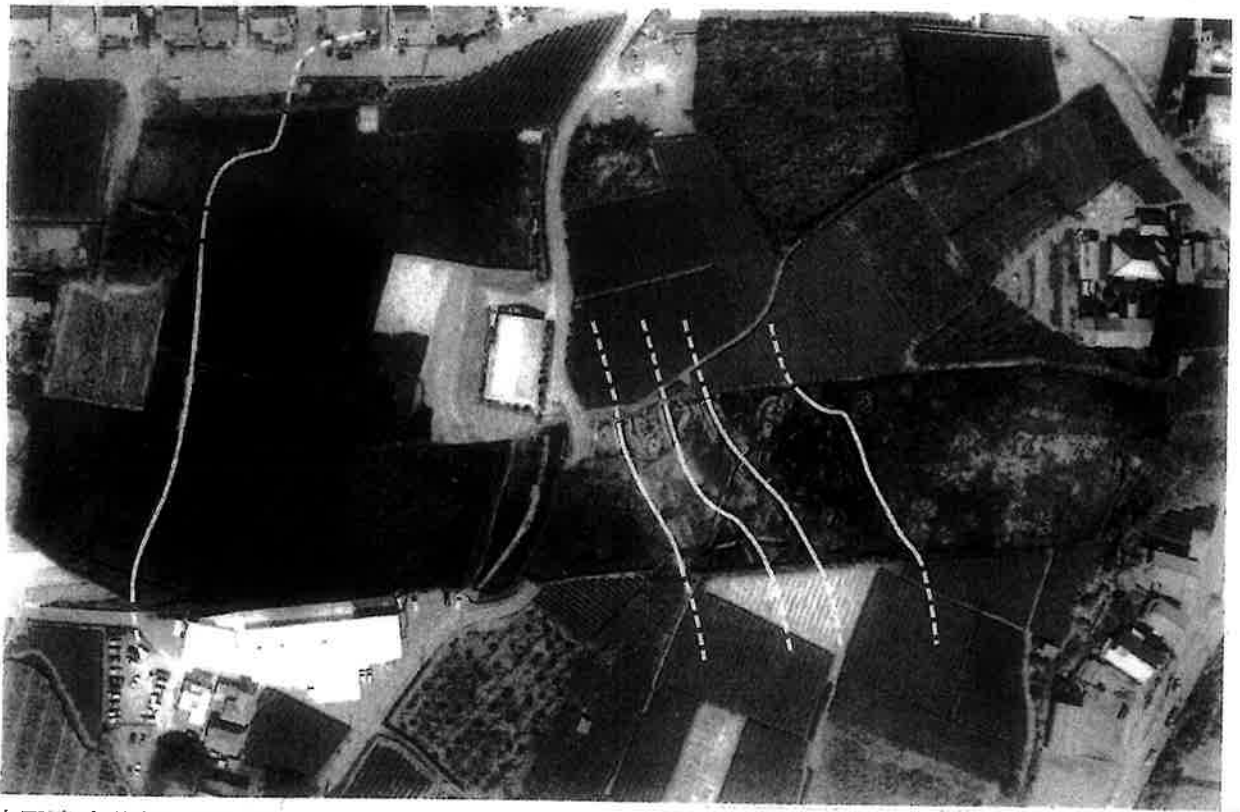
久留米市市ノ上東屋敷遺跡 (「市ノ上東屋敷遺跡」現地説明
会資料より 久留米市教育委員会)



八女市室岡丘陵の遺跡群の溝と集落
(八女市遺跡現地説明会資料他より)

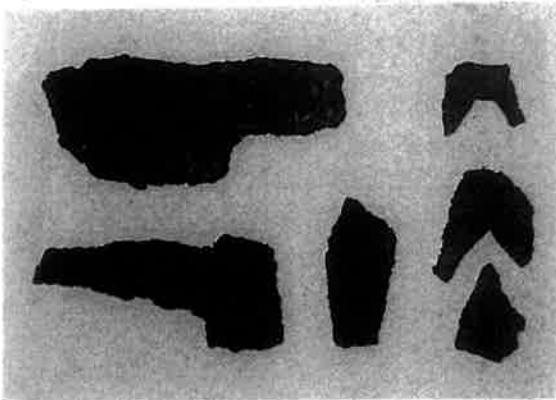


八女市深田遺跡の平面図 (赤崎敏男「福岡県
深田遺跡」『考古学ジャーナル』1995年 384号より)



室岡遺跡群中心部空撮
(白線部分は環濠)

八女市においても周
辺集落とは隔絶した大規模な環濠を伴う室岡遺跡
群が発生しました。このような大集落は、古墳時
代における豪族の支配地域につながるものとして
注目されます。



鉄器片
上段左 11cm 西山ノ上遺跡出土

北山今小路遺跡では200軒を超える竪穴住居と多数の
石材が発見されました。石英斑岩と呼ばれるこの石は、
奴国(春日市周辺)で銅製品鑄造用の鑄型として用いら
れていたことが研究で判明しています。

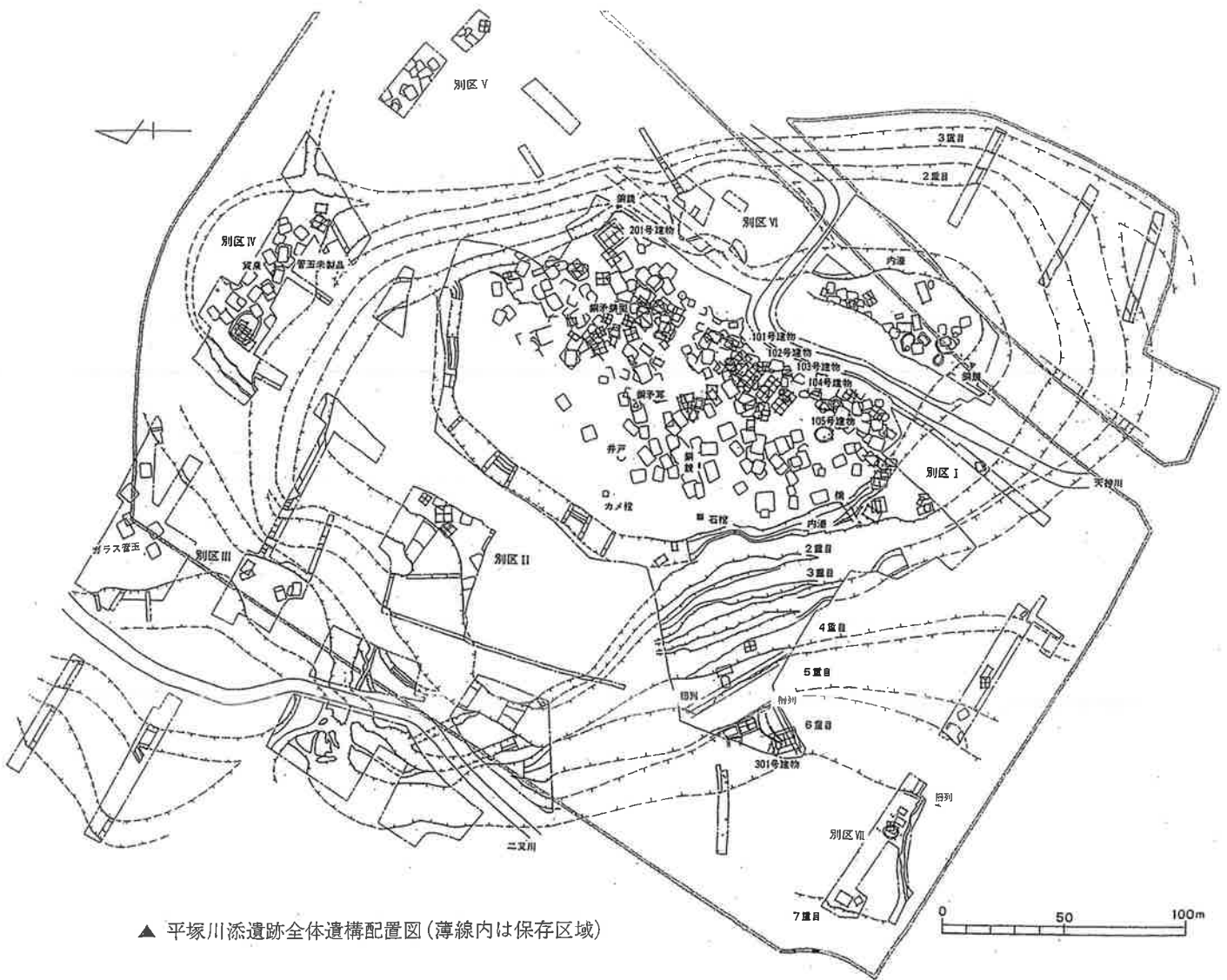


砥石
下段左 16.6cm 西山ノ上遺跡出土

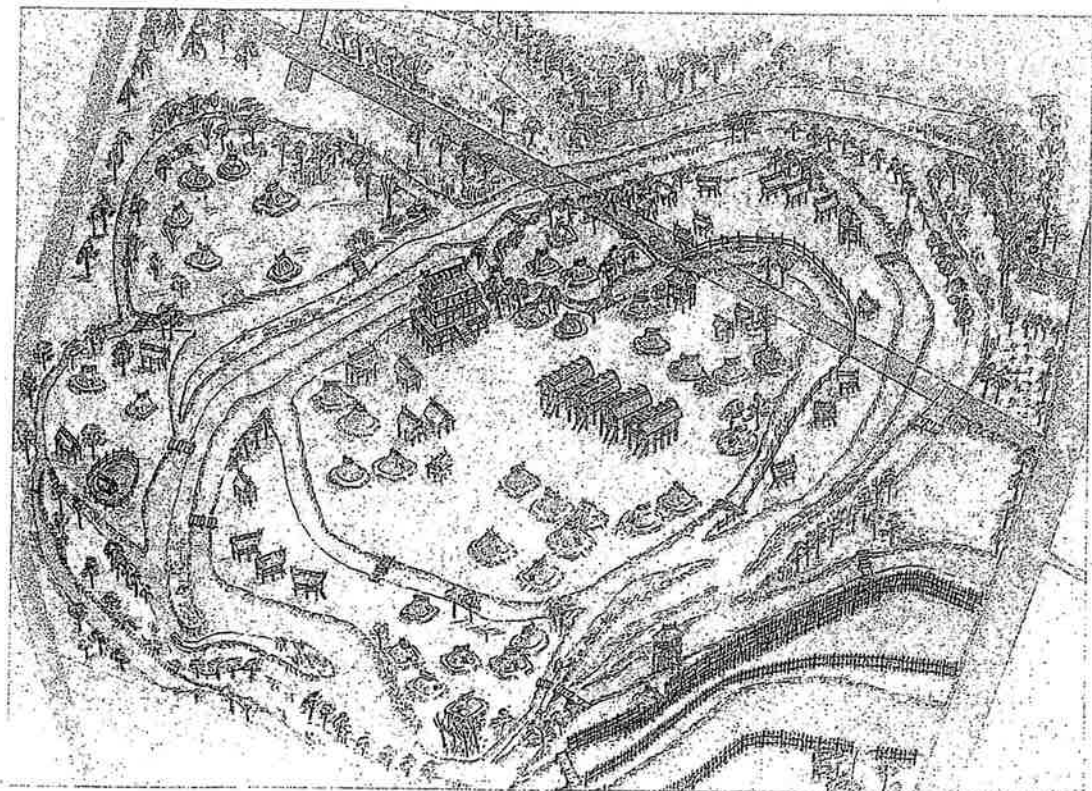


北山今小路遺跡

八女市岩戸山歴史文化交流館, 2015『常設展示図録』より



▲ 平塚川添遺跡全体遺構配置図 (薄線内は保存区域)



平塚川添遺跡を愛するみんなの会, 1995『水に浮かぶムラのはなし—「平塚川添遺跡と
 邪馬台国」シンポジウム報告』

平塚遺跡群 福岡県 甘木市の意味

西谷 正



耶馬台国時代の集落跡や多重環濠が見つかった福岡県甘木市の平塚川添遺跡



包括する程度の地域的な部族国家であった。

比へて優越性を示す。平塚川添遺跡の北東約一五〇メートルに隣接し、一部で、濠も共有する平塚山の上遺跡も重要である。山の上遺跡は、山添遺跡と一時的に共存しつつ、古墳時代前期(約千七百年前)に及んでいるので、平塚川添遺跡の終焉のころ、引き続いて、集落の中心が平塚山の上遺跡へ移っていたと見るべきであろう。

国の形成・発展を示す 大和政権支配の過程も

福岡県甘木市の平塚川添遺跡は、私たちが予想もしなかった低地に立地している。それに対して、すぐ東側の台地は、かねて遺跡の多いところとして知られてきた。そこには粟山の環(かめ) 墳墓群、小田道の住居跡群、そして大願寺の方形周溝墓など、弥生時代中期から後期を経て、古墳時代初期にいたる遺跡群が濃密に分布している。この一

とは、東・西をそれぞれ流れる佐田川と小石原川に挟まれた海抜一〇〇級の地形的に安定した台地が、先史時代の生活適地として格好の条件を備えていること無関係ではない。そこへ平塚川添遺跡が見え、十六基の環濠などが掘りこまれたわけであるが、これらの遺跡群を全体としてどうのよいに考へたらよいのであろうか。

まず、つい最近になって調査された平塚山遺跡は、ただの環濠墓である。漢帝国と外交関係について、平塚山遺跡の



別の地点でかつて、中国前漢の銅鏡が出土している。それはおそろしく中期後半(約一千年前)の環濠墓に副葬されていたと考えられる。この中環濠を所有するといふことは、漢帝国と何らかの外交関係をもった結果と推測される。

このように、平塚の地に残された遺跡群をトータルに見ると、地域における国の形成・発展や、大和政権の地方支配の過程が見えてくるのである。その中心にあつて、平塚川添遺跡は、福岡県はもとより全国的に見ても、耶馬台国時代の集落構造や建築・土木技術などを解明する上で、きわめて貴重なものである。

『西日本新聞』一九九二年一月十六日付

邪馬台国が近付いてきた

佐賀県・吉野ヶ里に次いで邪馬台国時代の北部九州の様子を語る有力な遺跡が、また見つかった。

福岡県甘木市の平塚川添遺跡で確認された六重環濠の大集落跡(弥生時代後期)である。このような遺跡の発見は九州で初めてだ。発掘が進むにつれて環濠は七重、八重と広がる可能性もあるという。

平塚川添遺跡は、吉野ヶ里から約

三十キロの地点にある。いずれも弥生時代のクニとして、どのような関係があったのか。今後の調査への興味は尽きない。

関連する宮殿や王墓などが発見されれば、吉野ヶ里に匹敵する第一級の史跡となるだろう。

同遺跡周辺では以前から弥生時代の集落が見つかっており、早くからこの二帯を「邪馬台国時代のクニ」

と推定する研究者は多かった。

紀元一三世紀ころの日本と日本人の暮らしぶりを記述した中国の史書「魏志倭人伝」には、邪馬台国や卑弥呼が描かれている。

「九州説」に有力な証拠が

卑弥呼の登場以前には多くのクニが争いを繰り返し「倭国乱れ、相攻伐すること歴年」だったと記されている。後漢書が「倭国大乱」としている時期だ。

これまでに確認された六重環濠をはじめ警備施設とみられる建物跡、高度な技術を駆使した木製の橋、さくなどで防御を固めた築造は、倭国のクニ同士が緊張関係にあつて激しい戦闘を繰り返していたことを物語っている。

吉野ヶ里が「魏志倭人伝」を裏付けたように、平塚川添遺跡もまたこれらの史書の記述を物的に証明する貴重な手掛かりと言える。

「魏志倭人伝」に登場する邪馬台国をどこに特定するかは、江戸時代から論争的である。

畿内説と九州説の決着はまだついていない。九州説はさらに細分化されて多くの候補地が挙げられている。邪馬台国をめぐる研究は、専門家にアマチュアも加わって大きなロマンをかきたてている。

決め手になるのは、魏王が卑弥呼に贈ったとされる「親魏倭王」の金印と卑弥呼の墓の発見だ。







「卑弥呼以て死す。大いに冢(ちよう)を作る。径百余歩、徇葬(じゆんそう)する者、奴婢百余人」と魏志倭人伝には記されている。

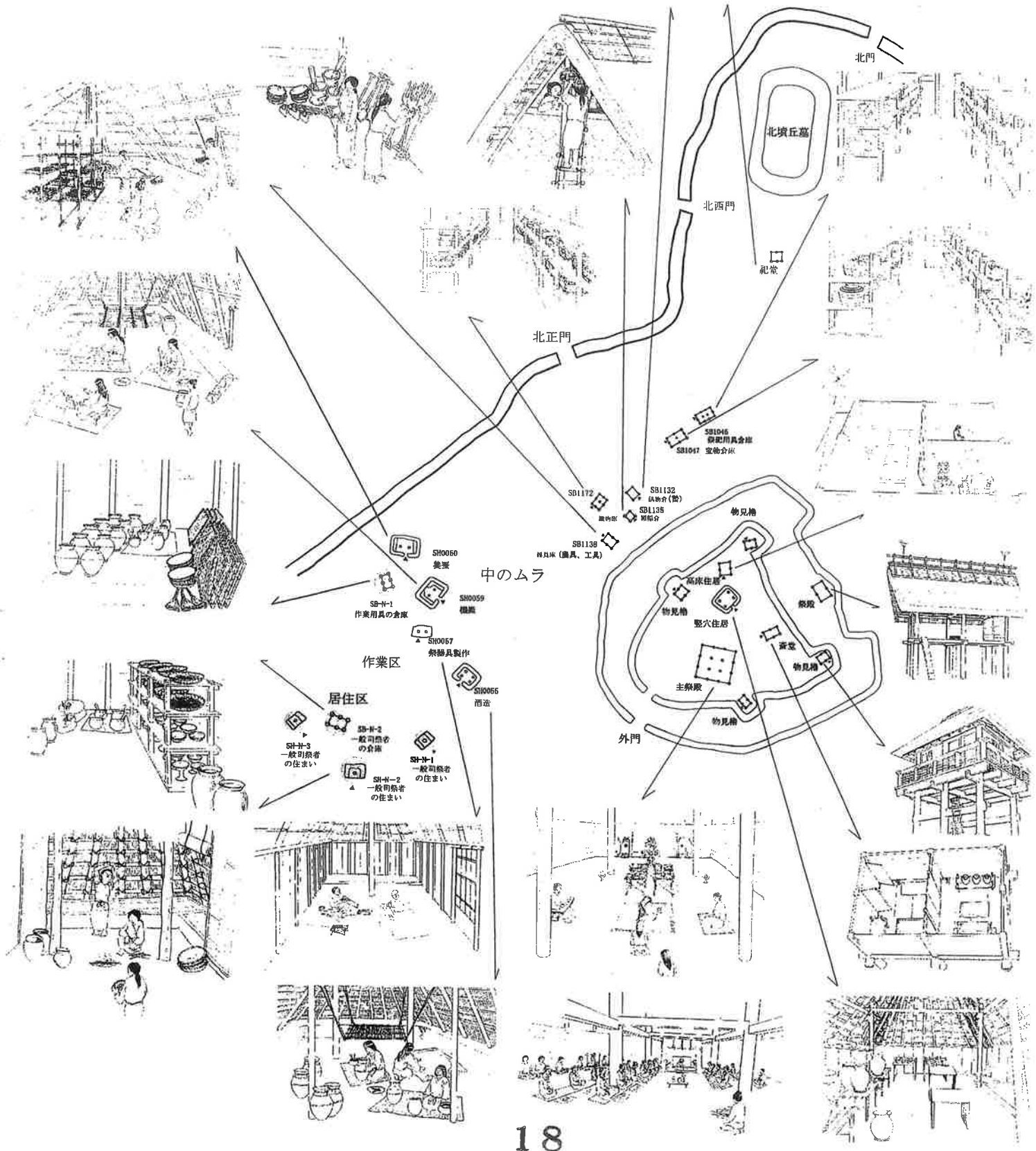
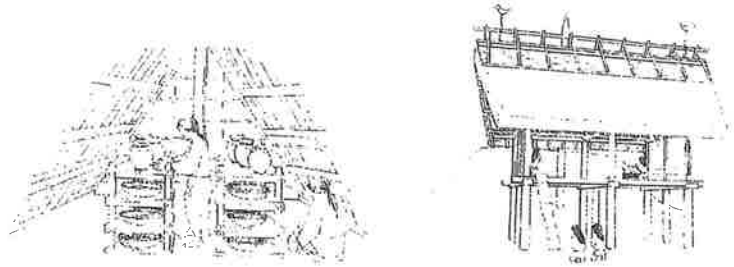
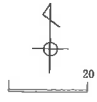
甘木・平塚川添遺跡は、邪馬台国・九州説を有利にする物証として、ロマンに彩りを添えるだろう。

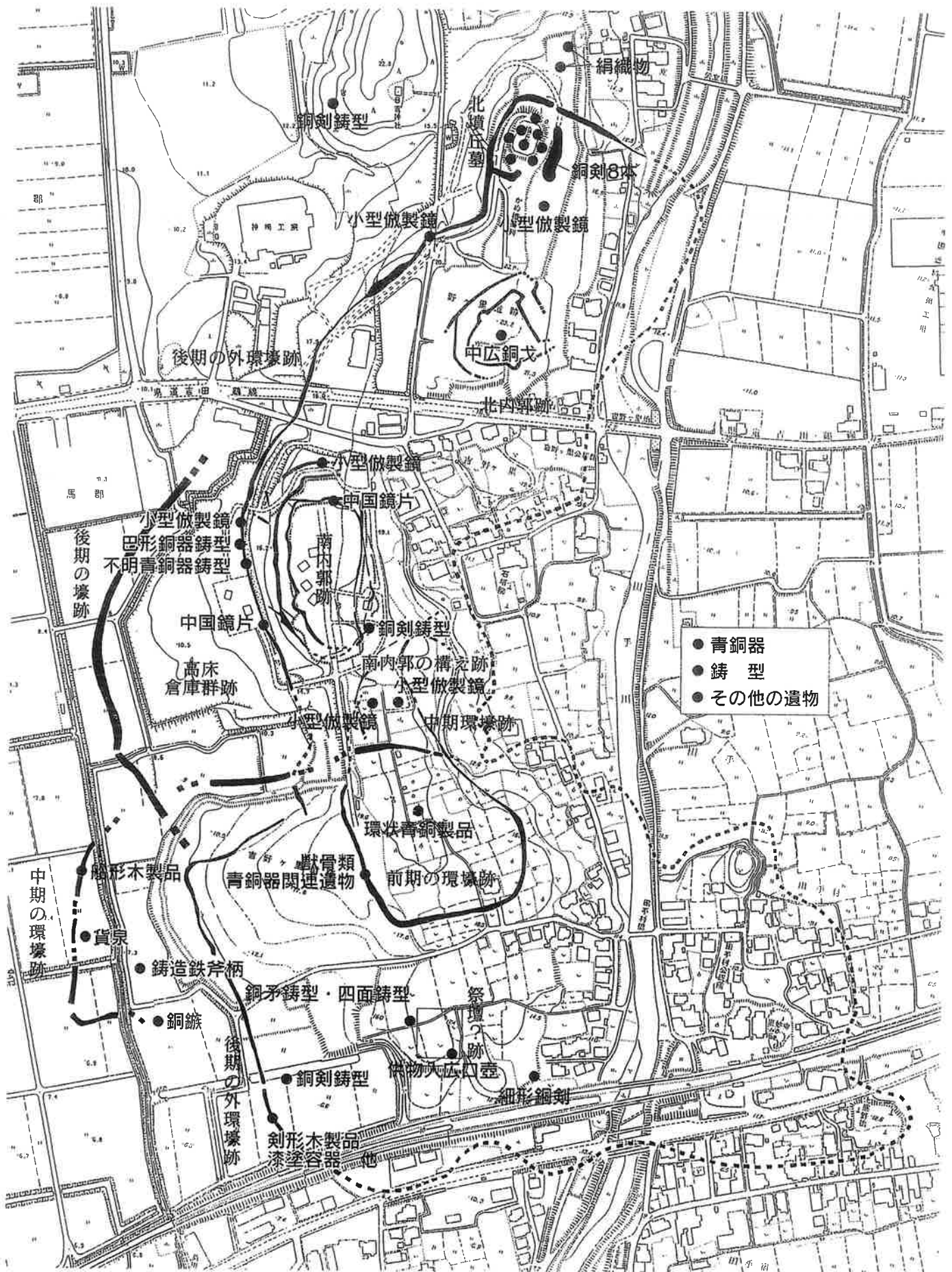
また甘木・朝倉地方には三輪、長谷山など奈良地方と同じ地名が多い。六六一年に百濟救援の途中で、この地で病没した斉明天皇にちなむ史跡「橋の広庭」などもある。

今回の発見で、同地方の文化的価値は一層高まった。これを町づくりに生かす道も考えてほしい。

歴史の宝庫九州は、まだまだ新しい可能性に満ちている。

-  掘立柱建物 (1間×1間)
-  掘立柱建物 (1間×2間)
-  掘立柱建物 (2間×2間)
-  掘立柱建物 (2間×3間)
-  掘立柱建物 (3間×3間)
-  竪穴建物
- 推定建物





吉野ヶ里遺跡から発見された主な弥生時代の出土品

吉野ヶ里と「国」・「王」

西谷 正

吉野ヶ里遺跡における最大の特色は、何と云っても、これまでの弥生時代文化に対するイメージを大きく変えた巨大な墳丘墓の発見であろう。そして、大規模な環濠集落の発見もまた、九州の弥生文化観を大きくイメージ・チェンジさせた。

その結果、そのような現象の背景に、「魏志倭人伝」に見える、邪馬台国や女王卑弥呼を連想させたり、30国や王との関連で話題を呼ぶことになった。

まず、吉野ヶ里遺跡の墳丘墓から見ることにしよう。さきに巨大な墳丘墓といったが、その規模は南北の長さ約40～45m、東西の幅約25～30m、そして、現存する高さ約2.5mといったふうに、地山に巨大な墳丘を盛土によって築いている。もとの高さは4～5mほどあったと推定されているが、墳丘墓はまた、吉野ヶ里丘陵ではもっとも高い場所に位置しているので、当時は、かなり壮大な外観を呈していたと思われる。さらに、墳丘の南側から西側へと迂回するような形で墓道が掘り込まれている。そこでは祭祀が行われたことを示す丹塗磨研土器の一群も検出されるなど、完成度の高い墳丘墓といえる。

墳丘に掘られた試掘調査は、墳丘全体からすると一部分にすぎないが、それでもこれまでに、全部で6基の成人用大型かめ棺が発見されており、しかもそのいくつかには、細形銅剣やガラス製管玉などの副葬品もしくは装身具が含まれていた。したがって、この墳丘墓は、外観・内容ともに、ほぼ同時期に営まれた1000基をはるかに凌駕する、墳丘を伴わないかめ棺墓群に比べて、きわめて隔絶性の高い顕著なものといえよう。

墳丘墓で検出されたかめ棺は、北部九州におけるか

め棺の型式編年観にもとづくと、弥生時代中期前半の汲田式から、同じく中期後半の須玖式にわたっており、紀元前2世紀末ないし1世紀前半から後半にかけてのころ、つぎつぎと埋葬されていったらしい。しかも、墳丘墓のほぼ中央部に、いまのところ、墓壙・かめ棺ともにもっとも大型で、年代的にも古いものが埋置されているのを見ると、この中央部のかめ棺の被葬者こそ、この墳丘墓築造の契機をつくった人物であったと思われる。因みに、吉野ヶ里遺跡では、弥生時代前期の前半に始まった集落が、その後半ごろから、環濠集落を含むいくつかの集落群を形成するようになる。そのような弥生時代前期後半における画期的な発展を背景として、これまでの先学の研究成果に照らして考えると、墳丘墓の出現期に当たる中央部かめ棺の被葬者は、弥生時代前期末から中期初頭にかけて形成されていた農業共同体もしくは部族国家の首長層であったと思われる。

ところで、吉野ヶ里遺跡ではまた、その墳丘墓から南方におよそ1kmほどのところで、もう一つ同時期の墳丘墓が見つかっている。この墳丘墓についても、その隔絶性ゆえに、同じような首長層を考えると、吉野ヶ里丘陵には、複数の首長層の存在が考えられる。仮りにそうだとすれば、かれらが、支配共同体を構成し、首長の交代ないしは正・副のような分担を行っていた可能性も出てくる。

さて、吉野ヶ里遺跡の北側にある墳丘墓で興味があるのは、いまから35年ほど前のこととして、この墳丘墓が果樹園の造成に際し、削平されたとき、銅剣類とともに銅鏡が出土したといわれる。しかも、その銅鏡は、当時者の証言に徴すると、前漢鏡の可能性が考えられる。いまのところ、そのような証言の裏づけはとれていないが、吉野ヶ里遺跡付近では、これまでに、中国の前漢や後漢の銅鏡が少なからず出土して

佐賀県教育委員会・日本放送協会・朝日新聞社、1989

『「魏志倭人伝」の世界 吉野ヶ里遺跡展』

いる。すなわち、吉野ケ里遺跡では、3点の中国鏡の破片が検出されているが、そのうちの一つは、後漢の内行花文鏡の外縁の一部に相当する。吉野ケ里遺跡の墳丘墓から北方へ3^{km}ほど行ったところで、同じ丘陵の付け根部付近に当たる神埼郡東脊振村の三津永田遺跡のかめ棺墓群からは、前漢の内行花文明光鏡1面と後漢の四蛇鏡と流雲文縁五獸鏡の2面が出土している。吉野ケ里遺跡の東北2^{km}のところを目とすると、同じく東脊振村の横田遺跡のかめ棺墓から後漢の方格規矩四神鏡が1面見ついている。さらに、そこから1^{km}ほど北東に行ったところでは、同じく東脊振村から三養基郡上峰村にまたがる二塚山遺跡群のかめ棺墓や土壙墓から、破片鏡2面を含む6面の、前漢の内行花文精白鏡・内行花文昭明鏡や、後漢の内行花文鏡・波文縁方格規矩鏡・波文縁獸帯鏡などが出土している。これらの中国鏡は、前述のように、この付近に形成されていた農業共同体における首長を頂点とする支配階層、あるいは、支配共同体の首長層の、いわばステイタス・シンボルであったものが、後に副葬されたものであったろう。

そのような中国鏡は、当然、朝鮮半島北部、現在のピョンヤン付近に設置されていた中国・漢帝国の楽浪郡からもたらされたものであったことは、いまさら説明を要しないであろう。

ここで、楽浪郡といえば、『漢書』地理志の有名な記事を想起する。つまり、「それ、楽浪海中に倭人あり、分かれて百余国をなす」というのである。ここに見えたとおり、『漢書』において、楽浪郡との係わりで、倭と呼ばれた日本列島と、そこに「百余国」の存在が登場するのは、漢帝国からいうと、その領域の東疆において、朝鮮半島の「郡」と日本列島の「国」という形で、地方行政制度下に編入したこと、もっといえば、直接・間接の支配体制下に組み入れたことを意味す

る。ここにおいてはじめて、日本列島内で「国」や「王」が登場するわけである。吉野ケ里遺跡の場合でいうと、前述のような農業共同体ならびにその首長層が、中国の漢帝国と外交関係を結んだときに、「国」となり、また、「王」と認証されたと考える。というのは、中国では、漢の高祖が施行した郡国制を背景として、皇帝が中央から官人を派遣して直接的に経営した郡県と並んで、その縁辺の地域には諸侯を設けて「国」と呼び、王や侯を置いた。ここでいう王国は、郡県制度下の一郡もしくは数郡、侯国は一県もしくは県の一部ぐらいであったといわれる。したがって、郡・国ともに領域の広さにはあまり隔りはない。そのように見ると、中国史書がいう倭における「国」とは、中国の直轄地ではなく、周辺の方で、しかも中国との間に朝貢関係を結んだ政治的地域集団もしくは農業共同体を指すらしい。そして、規模は、中国の郡あるいは県ぐらいの大きさであったようである。中国の郡や県あるいは国に大小があったように、倭の「国」ぐにの間でも大小があったろう。邪馬台国の7万余戸というのは、楽浪郡の4万5千戸よりずっと大きい。また、対馬国や伊都国のように千余戸というのがある。「魏志倭人伝」に記された戸数は、そのまま事実とはいえないが、いずれにしても中国に「国」と映った日本の「国」ぐににも規模に隔差があったのは当然であろう。

さて、「魏志倭人伝」の冒頭に出てくる倭の諸「国」を見ると、まず、対馬国があり、つづいて一支国・末盧国・伊都国・奴国などと順次現れる。ここで気づくことは、それらの「国」が、10世紀前半に編纂された『延喜式』に記載される一郡（松浦郡・怡土郡・那珂郡）とほぼ対応する。対馬・一支の場合は、島であるので国に準じて扱われ、二郡（上県郡・下県郡、石田郡・杵岐郡）に分かれている。その場合の「郡」はもちろん、大宝令以前の「評」からくるが、そのような

地方の行政区画が成立する背景には、すでにその当時、そのような一定の政治的集団が、日本列島内の諸地域に形成されていたと考えられる。そして、そのような政治的集団の成立は、律令制時代をさらに古くさかのぼる。『日本書紀』によると、北部九州では、そのような政治的地域集団が、4～5世紀に大和政権による統一過程で、地方豪族が服属の記しとして献上した「^{あが}県」の分布地域とも重複する。しかも、それらの「県」の設置地域には、4～5世紀ごろの前方後円墳が営造される。たとえば、2、3の例を上げると、対馬国では下県と鶴の山古墳、一支国では壱伎県と天神の森古墳、末盧国では松浦県と谷口古墳といった相関関係が認められる。

したがって、日本列島内の地域的・政治的集団として、3世紀の「国」は、4～5世紀の「県」をへて、8世紀以降、19世紀までの「郡」へと変貌していったことになる。その間、『日本書紀』景行天皇の条に「八女国」とか、『隋書』倭国伝に「^{くに}軍尼」といった表現が見えることを考えると、すでに、「国」が呼称されなくなり、「県」と呼ばれるようになった時代に、古い呼称も通じたことを物語っている。また、19世紀の「郡」の名残りは、現在も各地で見られるとおりである。このようにして、「魏志倭人伝」の時代の「国」を考える場合、古代いらい近世まで続いてきた「郡」の単位を対象とすることに意義を見出すのである。

さて、「魏志倭人伝」に見える「国」が、実はすでに紀元前後のころに成立していたことは、前述のとおりである。ここで、そのころには出現していた吉野ケ里遺跡の大規模環濠集落や、その付近の中・小の集落遺跡に目を転じると、結論的には、そこに一つの「国」を想定できるのではなかろうか。そして、吉野ケ里遺跡はそのような「国」の中核ないしは拠点的な集落であったといえよう。また、吉野ケ里遺跡の墳丘墓は、

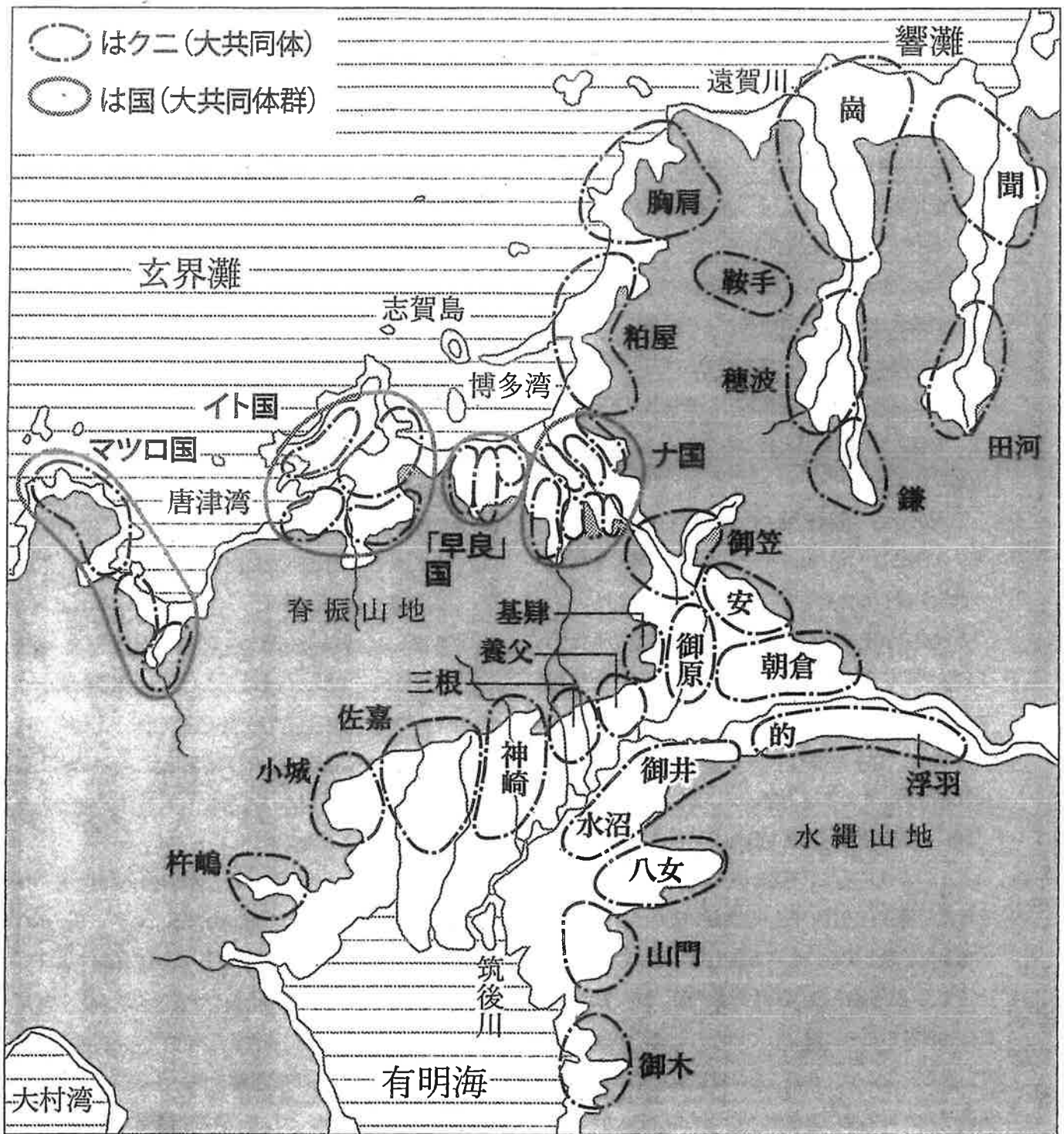
まさに、そのような「国」の「王」の墳墓にふさわしいものである。

つまり、この地域では、上述のように、中国鏡や青銅器が数多く出土し、また、古墳時代には目達原古墳群の形成が認められる。いっぽう、『和名抄』所載の肥前国神埼郡三根郷と、同じく三根郡を考慮すると、現在の神埼郡の一部と、三根郡にわたる地域が浮かび上がってくる。さらに、『日本書紀』雄略天皇の条には、筑紫の嶺^{みねのあがたみし}県主の存在を伝えている。このように見ると、三根(郡) — 嶺(県)そしてミネ(国)という類推も可能なのではなかろうか。ここでいうミネ(国)を特定するとすれば、江戸時代の新井白石らしい、一部の学者が比定してきた「弥奴国」がもっとも蓋然性が高いといえよう。

ところで、「弥奴国」に限らないが、当時の「国」ぐにの構造を考える際に、「国」において防衛的機能を分担した、いわゆる高地性集落の問題がある。吉野ケ里遺跡周辺では、いまのところ高地性集落は確認されていない。ただ、吉野ケ里遺跡の西北3^きのところにそびえる、海拔148^ふの日の隈山は、その有力な候補地といえよう。因みにここは、後世に烽が置かれたところと推定されている。

さて、このような「国」は、佐賀平野において、吉野ケ里遺跡を中核とした地域のほかに、いくつかの地域で想定が可能である。すなわち、律令体制下の「郡」と拠点集落と青銅器出土地などを総合すると、東方から順次、基肄・養父両郡と鳥栖市の安永田遺跡群、佐嘉郡と佐賀郡大和町の惣座遺跡、小城郡と小城郡三日月町の土生遺跡、そして、杵島郡と武雄市の釈迦寺遺跡などに象徴的に見られるような、少なくとも五つぐらいの「国」ぐにが想定できるのではなかろうか。

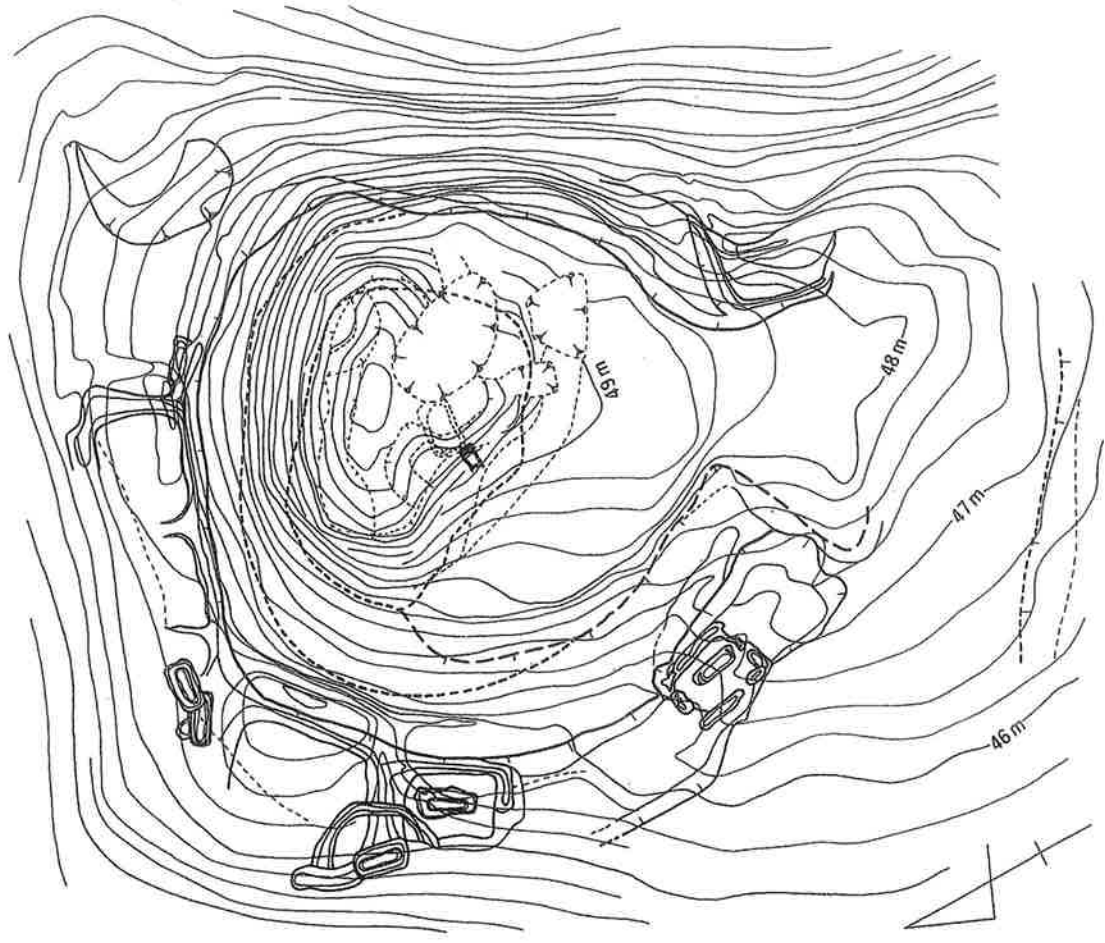
(九州大学文学部教授)



紀元前後の北部九州の部族的国家群

寺澤 薫, 2016 「王権はいかに誕生したか」

『纏向遺跡と邪馬台国の全貌』角川文化振興財団



津古生掛古墳全体図



津古生掛古墳出土の方格規矩鳥文鏡

